

俳諧新十家狂句集冬



士朗樗堂蒼虬乙二完來
道彥成美舛六月后奇岡

癸句十家類題集

河內俳諧堂朱報編
浪華阿里園六書編



俳諧新十家類題彙冬部

目錄

十月	小春	冬	冬	神以旅	神以留主	玄猪
連戶忌	色蕉忌	十夜	二丁	初時雨	時雨	三丁
風	五丁	冬月	六丁	霜	初雪	七丁
				初冰	冰	水酒
落葉	八丁	散紅葉	枯節	冬木立	九丁	復花
山茶	茶花	枇杷花	冬牡丹	水仙	石路花	山
十丁	枯芦	枯薄	枯尾花	枯菊	枯草	十丁
野	蕎麥刈	冬籠	冬構	冬山	埋火	巨
燧	火桶	湯婆	櫛	炭	炭竈	炭團
						余

紙衣十四丁 綱代守 水鳥 千鳥十五丁 鳴十六丁 鶯

鶯 鷦鷯 鷹 鷹狩十七丁 牡蛎十八丁

十一月 冬玉 神樂 御火燒十九丁 雪十九丁 雪竿

檼 雲廿一丁 牙 冷 氷柱 鐘氷 寒廿二丁 大根曳

荳菜 荳 風呂吹 蕎麥湯 藥喰 海氣廿三丁

鯨廿四丁

十二月 臘八 寒月 寒紅 寒晒 寒聲 寒

念佛 鉢扣廿四丁 冬梅 臘梅 冬椿 煤掃廿五丁

餅搗 年本 春色 春待 柎刺 追儺廿六丁

年忌 年市 歲暮 年惜心廿七丁 年々 大廿日

年守夜廿六丁

同 雜部 目錄

雜廿九丁 神祇卅丁 利教卅二丁 忠 無常卅三丁 追悼追

善卅三丁 懷旧卅五丁 述懷 贈答卅六丁 名所卅八丁 羈旅

畫贊四十丁 詩語四十五丁 祝四十六丁

卷之四
 詩
 五言古詩
 五言律詩
 五言絕句
 七言古詩
 七言律詩
 七言絕句
 雜詩
 目錄

俳諧新十家類題集冬部

河内 俳諧堂系記
 浪華 阿里園六書
 兩編

十月

十月や冬々雪はつゝ葉は花 成美
 十月や枯木の中は花は寺 標堂
 十月やさくさく花は木の下り 〃
 十月や梅は木の下りかゝる葉 升六
 十月ハ鶴さうさうと富の丸 〃
 十月や柳さうさうと水は流る 〃

冬日

冬秋朝日 葉より冬より果しり 成員
 滋は 次日 冬より 滋より 乙二
 冬より 白より 次より 蠅より 座より 猫
 冬より 居より 止より 冬より 夏より 乙一
 樗堂

神
旅
神
田主

松風や神女留まぬ月夜
成美

壽

玄猪

門へけし名やわねをけふりし 升六

達 广忌

達 广忌や膳けきふむむ 升六

中 广忌や味をけけ 升六

色 蕉忌

珠敷 广忌や味をけけ 升六

といふけ佛け 升六

十夜

初時雨

つ前け家いけむる 升六
十夜青梅 升六
勝子うむ家や十夜けき 成美

初 一 升六

板 一 升六

山 一 升六

大 一 升六

さ 一 升六

山 一 升六

時ありて法に如く雖も在り
 人けりてやうに田ありて
 中なる人けりて小き
 残像ありて提しけり
 夕にけりて田ありて
 朝にけりて田ありて
 春にけりて田ありて
 冬にけりて田ありて
 中なる人けりて田ありて
 中なる人けりて田ありて

イニ
時雨なりあちく、高た赤れ節、
移れ事いとそくかゝりし時より、
奈良七根ありや時雨は七丈寺、
志くもやふ程に紫れくつさく、
月居
あられ島ゆきまじりぬえん

六、
お著のうたを
お粘りもちく
とあはれ上
まじりぬるや
さきふもえし

あしやゆき 雲はるるに
 風は吹ぬ 晴るるに
 本村に 住るる人 園はす 成良
 あしやねい ちと東福寺
 風はすくや 龍は種をさく
 あしはくも ゆきはくも 小龍
 柱は葉ふ ぬるるに ありは
 あしはくも ぬるるに ありは
 木枯や ぬるるに ありは
 あしはくも ぬるるに ありは
 月居

冬月

あしやゆき 雲はるるに
 あしはくも ぬるるに
 風はすくや 龍は種をさく
 あしはくも ぬるるに
 木枯や ぬるるに
 あしはくも ぬるるに
 月居

夕波やうるふ山も冬は月 橋生
 くらふも月もあつたあつた
 飽きもあつたあつたあつた 士朗
 さうもとすつたあつたあつた
 冬は月もあつたあつたあつた
 世ううにせつたあつたあつた
 戸ううにせつたあつたあつた 茶丸
 行もあつたあつたあつたあつた 定本
 冬は月もあつたあつたあつた 成美
 冬は月もあつたあつたあつた

霜

冬は月もあつたあつたあつた
 月ううにせつたあつたあつた
 冬は月もあつたあつたあつた
 世ううにせつたあつたあつた
 戸ううにせつたあつたあつた
 行もあつたあつたあつたあつた
 冬は月もあつたあつたあつた
 冬は月もあつたあつたあつた

味も極め焚きと焚き氷うれ 之耳

水 酒

はれより一も枯れはれより一も 奇酒

落 葉

ふりふりふりふりふりふりふり 士朗

拾ふふりふりふりふりふりふり 乙二

はれよりふりふりふりふりふり 月居

はれよりふりふりふりふりふり 道彦

はれよりふりふりふりふりふり 成良

家よりふりふりふりふりふり

はれよりふりふりふりふりふり

住よりふりふりふりふりふり

はれよりふりふりふりふりふり

およりふりふりふりふりふり

鶏よりふりふりふりふりふり

はれよりふりふりふりふりふり

大寺よりふりふりふりふりふり

はれよりふりふりふりふりふり

橋よりふりふりふりふりふり

散紅葉

山も紅葉のころ木は赤く
ちり紅葉裏ふちの日は
夕煙のけしき紅雲
成英

枯柳

むらさき毎日うらめし
うらめしうらめし梅の
白鳥のゆへ柳の心
成英

冬木立

鶴も高きけり冬木立
成英

復花

かへり花のころも今を
常盤のまはりのころ花
十月はさくらもひらく
かへり花のころも今を
福金神社のころ花
さくらもさくらも今を
成英

山茶花 茶花 枇杷花

さくらもさくらも今を
花のころも今を
成英

枇杷花見りし日きつるはるを 升六

冬牡丹

十月のいづれか牡丹 乙二

買ふ代の春風さるゝ牡丹 乙二

水仙

ふらんや一室の水仙 乙二

すいせんは朝の白の垣 升六

白川は雪はふゆりし 乙二

石路花

ふらんや中なる石路花 乙二

やいばるんいづれは花 士朗

ふらんや中なる石路花 月居

枯芦

枯りしは菊おのる 乙二

枯りしは菊おのる 乙二

枯芒

一つは枯れぬ 升六

一つは枯れぬ 升六

根よりぬ 升六

冬うれぬ 升六

枯尾花

枯尾花 自居
 多きものなりては枯尾花 道彦
 といふ人もかたけの枯尾花
 日け新けたるも弱く枯尾花 青彦
 赤きものなりては枯尾花
 枯尾花 一
 波のうへに人かたけの枯尾花 橋生
 枯菊 枯草

菊の 赤懐炉と抱く 主居 升六

枯野

枯野 橋生
 枯野 赤彦
 多きものなりては枯野 道彦

九重けの枯野 月居
 月居 道彦
 赤彦
 成彦
 青彦
 道彦

しるは日も入ぬ枯野はさきより 士朗
 雲うかき種もくはたふれ
 おひきう住やふれひつ家
 里はうかき何とちうもさ日月 成美
 蕎麦刈

そいつに道うたふ籠の上 道彦
 冬籠 冬構 冬山

梅柳しるは出あけくさきより 椿華
 ねと構む人あもいづる冬籠 士朗
 冬あきと似あきあきふ人我 月居

井よりくや大長刀と冬ありの 成美
 つかうふれ甘蔓もくさき冬籠
 背中へふねれと即と冬ありの
 徒もあけ答もくさき冬籠
 冬ありのねふれくさき冬籠
 宇治山や誰く生く冬ありの 月居
 いのもあきと構もくさき冬籠 升六
 へつへつへつへつへつへつへつ 椿華
 埋火 火炬
 埋火やうたふれふれすれ 定永

火桶

湯婆

櫓

うしろや人がおこへるなり 道彦
 握火や此の字は戸も妻いなり 月居
 志ぬるをけうとくふぬる巨魁 定来
 箱 赤い 正月 正月 古火桶 月居
 うやうやうたるを我も抱けり 道彦
 櫓 舟に影の舟の舟 乙二
 親子〜〜は舟やん櫓は船 定来
 櫓の舟一旅人狸の〜〜 道彦

炭

炭竈 炭團

念

峰は雪宇治は山寺なり 士朗
 炭〜〜と杉の人の戸は 櫓生
 杉をけ〜〜ぬる炭は 道彦
 休むるを〜〜る炭は 成美
 炭〜〜は玉に 櫓生
 た〜〜の白〜〜と 升六

引〜〜はぬるなり 成美
 赤いなり主の 道彦

棹

楮は雪に影は水に聲は月
 乙二
 親子くくは外やん楮は霜
 定年
 楮は雪に影は水に聲は月
 乙二
 親子くくは外やん楮は霜
 定年

四十三

炭

炭電炭團

峰々雲宇治は山々舟りたり
士朗
岩くくと松の久戸戸
樗牛
杉中け一節ふれ是六炭はむち
道彦
休あまのさきしねて炭俵
成美
炭うまはなれた玉に四隅分
樗牛
たえん法印うくと日香い色
升六

食

引るはたきふれ 成る
ふすまはし主中流中 道彦

たるいふふ屋はりのて紙衣
 乙二
 いけちうたはれよと念ふい危
 所をつていけやふはれ嵐山
 士朗
 紙衣
 上京いふ人ふたうふ
 ちりし山りしはち紙衣
 月居
 まうや紙衣つるからふ
 月居

綱代守

水島

男外々鯨い家々
 道彦
 家々々々家々々々
 奇彦
 月居
 水島
 種々々々々々々々
 奇彦
 水島
 我々々々々々々々
 士朗
 水島
 毛々々々々々々々
 蒼丸
 沖中々々々々々々々々
 月居
 水島
 油々々々々々々々
 月居

千鳥

さうさうねねきつ子鳥か 青溪
 ねねきつ子鳥か 青溪
 夕さし敷さあさささささ
 磯さささささささささ
 白ねねねねねねねねね
 鶴つさささささささささ
 むさささささささささ
 さささささささささ
 川勢りんさささささささ
 蒼虬

鴨

ささささねねねねねねね
 さささささささささささ
 川上ハサササササササ
 ねねねねねねねねね
 川さささささささささ
 さささささささささささ
 久ほさささささささささ
 さささささささささささ
 ぬさささささささささ
 月居

梅提多しゆきつりてはさふ
 ぬく鴨を力にきり入るれ
 鴨もけり日南くはくまを
 小鴨にもよきくはくまを
 鴨もけりや雪よりちりぬ
 かもけり毛のきりきりや
 ねうはや鴨やつりて池は
 細うけく鴨や一時はさふ
 尻よりふ鴨もけりきり
 鴨もけりや雪よりちりぬ
 乙二

青竹はくまにけりてはさふ
 湖と鴨も埋きりてはさふ
 士朗

片隅はくまにけりてはさふ
 とくまにけりてはさふ
 うちのきりてはさふ
 とくまにけりてはさふ

鷓鴣

戸の中はくまにけりてはさふ
 茶袋はくまにけりてはさふ

松竹千尋もいふにさうい
 門に川もさういふにさうい
 いさきい阿まの胸さういふに
 いさきい阿まの胸さういふに
 小屏凡は色と入るさういふに
 如く映れさういふにさうい
 我娘おれさういふにさうい
 歯めわさういふにさうい
 楊つひさういふにさうい
 鷹 鷹 鷹

山さういふにさういふに
 鷹おれさういふにさうい
 鷹さういふにさういふに
 鷹さういふにさういふに
 鷹 鷹

売牡蛎もさういふにさうい
 士朗

十一月

冬至

大土をさういふにさうい
 士朗

吹ひく中より玉は日るも月居
 けり竹より玉は日るも月居
 上加へてふとありたるも月居
 龍より玉は日るも月居
 神樂 御火焼
 清代より玉は日るも月居
 箱車より玉は日るも月居
 門より玉は日るも月居
 淨火焼より玉は日るも月居
 升六

雪

大雪の中はつねに月ありて
 うき雪より玉は日るも月居
 為る雪より玉は日るも月居
 横町より玉は日るも月居
 鶴より玉は日るも月居
 山は雪より玉は日るも月居
 庵より玉は日るも月居
 人より玉は日るも月居
 雪より玉は日るも月居

雪は細顔赤いふたりのほし
降る雪は海山横ハあつらひきこ
琵琶形ハ雪はうの危家は後
雪は厂羽をうとなく眠く
うれしい雪やねはうつかり
降る雪は三井寺の山も月夜
雪もろや我のうとむる者
雪を年茶焙じけり色
雪や嵐ハ雪はうつらぬ
雪よりわくるは雪より清く

七二
、
、
、
、
、
、
、
、
、
士朗

老をうゝくく人雪はき
し山や山又雪は山つた
月と雪は夜とわく風情あり
さつめも雪の降る奥山家、
白く雪やきよみ山寺に月居
雪の人々も外を風情なり、
ゆきほこ車押ゆき雪は道、
かゝちと藤の家へ入雪樂、
雪は眼とやほひまけ思ふ蒼虬
あられぬ雪と何れすも、

雪はわつとふもさうとふひけ
ねは雪も羽をたて雪も皆白し
降すそおどろき雪は満田川
なまじつとふもさうとふひけ
梅はまゝ雪つむ中よりはけり 成美
雪は只ねと川人もまじり
誰もまじりねとひきまじり雪
うゝ雪とねり人の煙雪はそれ
雪はわつとふもさうとふひけ
何れんそとふもさうとふひけ

雪は道ゆつと氷情之ー 道
いせは雪は降い日もあるつての雪
松は枝折るゝ押や雪は
月雪はあつても月が雪は
雪はわねねは雪は雪は雪は 道
道

雪竿 橋

雪は竿は一本の雪は竿は
橋はあつては雪は雪は雪は 道

雲

雲はあつては雪は雪は雪は 道

雲

雲はあつては雪は雪は雪は 道
雲はあつては雪は雪は雪は 道
雲はあつては雪は雪は雪は 道
雲はあつては雪は雪は雪は 道

雲はあつては雪は雪は雪は 道

雲はあつては雪は雪は雪は 道

雲はあつては雪は雪は雪は 道

雲はあつては雪は雪は雪は 道

雲はあつては雪は雪は雪は 道

うらもいふもあまふ庭はね、

牙 冷

風ぞや枝をふれぬおぼへ 升六
雄鴻はね又も冷いあつた 乙二

氷柱 鐘氷

日け影や氷柱をくハ玉は夢 士朗
鐘氷の俊直くふるは舞を分 乙二

寒

菱帆のゆくをさきあすき、
竹は葉の舞をさきねさくれ、

さきや竹はさき 錯ねる

家もさきや山はけ

松風はさき山はけ 橋壺

紅いさきやあつた人ね

いさきやさきや破るき 成美

大根曳

おふさかきさきや大根川

長明の車もおふさや大根川

大根川はさきいさきとさきけ

荳菜 荳

定月如加哉あも一ツふあふ 養乳
定月をち〜影や敷の香 奇法
寒紅 寒曝 寒聲

定月如り〜たれり上も〜 升古
定月し〜月ねれ〜名
定〜名れ〜特紅袖れ〜 月居
寒念佛

定〜名れ〜あれ〜道彦
定念佛河漕く浦と〜定本
鉢叩

定月如り〜あれ〜士朗
定月や〜あれ〜
定月れ〜あれ〜
定〜あれ〜
月細き〜下〜鉢叩 成実
月鴨ね〜中〜鉢叩 奇法
萩ね〜ち〜為ね〜や鉢叩
淋〜定〜祖師ね〜つ〜鉢叩 標堂
定〜あれ〜あ〜あ〜鉢叩 養乳
定〜あれ〜あ〜あ〜鉢叩 外六

一夜うつくしき月をみれば
 夢もなかりてさるや年時
 来ふ誰と眼さうさぬさる友
 旅の何事もなくさる言
 くらゐりてさるさる鐘
 小室のさるさるさる言
 鉢僧も別はるさる言
 行とさるさるさる言
 たしとさるさるさる言
 形とさるさるさる言

升六
 士朗

柳

ちとやつく椿咲出
 ちとや桜入るさるさる言
 ちとや雪汁さるさる言
 とさるさるさるさる言
 たさるさるさるさる言

年々 大世日 年守夜

大世日 大世日 大世日
 大世日 大世日 大世日
 大世日 大世日 大世日
 大世日 大世日 大世日

一字八抄
定耳

俳諧新十家類題集冬部 畢

俳諧新十家類題集雜部

河内 俳諧堂未報

浪華 阿里園六響 兩編

無季

嵐子もいふや眼をわく嫁は雲 未久
親懐は憂ふいふもいふなり

詞事り類句

ひさせは果此一睡より

元日や在ぬさくは山家集 升七

花は錦も月も更科も此うつたは
風情をかり人の

もあまの初息 宝来
花をむくは鳥の白く人を思ふはく

あまのまは梅をうたはれ花 士朗
山家

日くは火親くは星は凡中
唐はくは花をうたはれ花 士朗

花をうたはれ花をうたはれ花 士朗
宝来

火も水も火も梅も花もあまの
秋も花もあまの

白も花もあまの
露部井をうたはれ花

花も川も花もあまの
人

花も川も花もあまの
青山はくは流水もあまの

花も川も花もあまの
花も川も花もあまの

清風名月一錢は買事と月は

風流は花よりおそく人より花

園の土よりおそく正月より

まけ戸のまじりあはれけり

月見でも人ほそけり

山に雲は白きを雲人庭に松

くね竹は風はくくおし

まけ月はいまわい

十子松と空はくく

山家

村中けりいふはくく

常は渡り常は流轉

約く内共尺據はくく

樵夫

新と推しはくく

紫うりはくく

くくはくく

けりはくく

乙二

住去奉納 春日山

いふを略して、
荒れぬを以て、
新編

梅 吟 夢 花 如 紅 似 火 升 六
松 之 不 夢 妙 樂 與 性 也 人 亦 壽 陰

降祭禮

秋のふりしるし

神路山

芳名記旭物多本立

後以國舍富氏姓先主東義靈社と
勅請したる所

實如也非也唱之

象頭山奉納

春如光臨山如命之如船諸
君とつては幸しくも七象匠山
月居

釋教

四天王寺夜施

白木如石也月如如尾等 升六

常於此洞見女人坐標坐
曉之川森竹寺裏此山
刈草堂於緣起之宮々

佳人如於所行兮先如之風
博學

三ノ

楊子相在江寧
嘗曰——子相在江寧
陳生好書之語——

志賀寺

志勢奇命極々大に二人扶持乙二
花屋裏よりやうけりお坐をいれり
春雨如極やうけり枯尾花 奇溪

恋

忍不逢恋

紙ふすゝ一ね終はまゝあゝ人月を

思恋

すそ終はく巨魁とあそひしう 横生

島原うゑ

杜より一ゆききんひやの月居

無常

まはる世をいひはく人々 升六

二希翁と茶思ふてあはれ

そはあやうけ下乃花すれ

追悼 追善

義仲寺に終るまゝ一祐昌法師をいひ

外よりぬきうきや枯尾花 横生

雪より人少くはるゝ世東は家 道彦

まはる世は枯甲を人けいふ 時久

二杯庵をいひ

名よりきた横生 花子ちりまきり 横生

死水香
 後山吹北
 花中
 蒼乳

悼貞松

新嘉坡吉寧街

悼蝶夢

靈經 卷之六

悼何某

玄學始於老莊

芳公
雲山
之
白
竹
と
雲
人
在
月
居

身之在復安分怡然樂
壽陰

孝如慈使之以和初禘

四世

秋
うねる麻衣のきり
新法

守山先生集

順本寺好書似此也經年

愛を二人で癒す神々々々々々

五形也莖中象此種

倬
事
國

毒うねるがねくしひ危

氏從氏初願忌

夏青木也卯象之噴之爲

倬大祇

物さへも世の本權はなかり
 邦一個はなかりのまじり
 大まじりな位はなかり
 西上人六百年忌
 月居
 西行塚
 魯隱と隅田川の橋

述懐

蘿髮如日

親より人多く見えたる
 老情
 秋風も春風もなかり
 病床
 名もなき女は流るる尾より士朗

贈答 自他わらうとせし

田中けり雲黄雀棲

うさからんまみれは風とあつて 月居

千鳥庵

あまのこゝろにまよはるる

子庵

初をねらふもいふ人たふさふ士朗

常盤崎とつづきわが我笑うる葉とく

春はふとやうなるをすめたる乙二

鬼子惟た郎

鶴あはれも都もゆき雪は光

はるかにやまに経るる

親と子の温あはれをいふ 秋永

詩草川

そはれぬ葉のうたてふとて

人たふさふ

旅するも庵はる人たふさふれ

は十の帰るる

さうはる入たてあつたはれ 升六

一葉とてあつて

謹に書留六降へに書き奉る
 抄書
 すんけりてはと書く無様の人よあつて因
 へてそなた風は枯る様は秋は色 升六
 多うあつて東の道と書く
 君やちとく書はて道通ふ 嘆士朗
 掠る様は秋は色 能満堂たてては書く
 菊は秋は色 我もゆつと書はて庭
 秋は色 秋は色 秋は色 秋は色 秋は色
 未報の東の道
 江の島の蛤も書く 月尾

おり人々書き奉る
 三月の旅をりては書き奉る 升六
 送別
 交り書やなはる様は秋は色 春乳
 本芽の五束齊と名はては書く
 標はる様は秋は色 春乳
 妻價の裁方母も書き奉る
 友はる様は秋は色 春乳
 大江丸と書く
 春乳

河波は國より奇蹟ありて時

河入りし事あるはかき一貝月居

名所

深子

深子や山はさへさへさへ月居

嵯峨

嵯峨や一里つはろくは花茶此

史よりくろくは人なりは山

嵐山

つりちんは花は枯るちんは

花は枯るちんは花は枯るちんは

ふ士

月より花はすなりあは山士朗

しるもやうくは山

花は枯るちんは花は枯るちんは

うきうきうきうき

うきうきうきうき士朗

須磨

苗代は花はよりの人々

雲うさの袖もささ月時
 かなさく人いふに遠くは秋
 風ささ戸をたたく遠く秋風
 すかぬ庵けつとも月時名残
 夕ぐれや烟もささ月時秋
 浦はますすくさく名残
 芳野
 西行はくとも月時名残
 かなさく人いふに遠くは秋
 風ささ戸をたたく遠く秋風
 すかぬ庵けつとも月時名残
 夕ぐれや烟もささ月時秋
 浦はますすくさく名残

住江

松久一年はくとも月時名残
 かなさく人いふに遠くは秋

風ささ戸をたたく遠く秋風
 すかぬ庵けつとも月時名残

夕ぐれや烟もささ月時秋
 浦はますすくさく名残

角田川

秋風やささ月時名残
 かなさく人いふに遠くは秋

うねりさや秋は思ひし湯田川 秋風

美葛原 生葛原のさきの人たつしを 橋本

鏡山 秋風は昨日吹くそかき山 奇蹟

紀玉川 移る空は猿やうしりきき水

和奇浦 高野山は影玉川は流るなり
田鶴はまゝさしとまぬる満月居

紀三井もは流るる小船くわは流

今治 今治のさきの人たつしを 奇蹟

寧樂

江口 多しや流るる人たつしを

不破算 田鶴はまゝさしとまぬる満月居

士朗

巖島

月に出くわすかきしつゝさきへ

美具山

かゝるやうな餘さけにやあま 月居

翠翠湖

湖は月や日はあまのやうに

鳴りやうやうあふ秋は風 奇俗

羅旅

ふたまたま道へ下りてけり 乙二

りけりや旅へははねと人 橋本
秋はあまの身をたもて給ふ 士朗
言はれぬあまの言はれぬ 乙二
秋は旅はあまの言はれぬ 士朗
旅はあまの言はれぬ 乙二
旅はあまの言はれぬ 乙二

月里

あまの言はれぬ 乙二

あまの言はれぬ 乙二

山寺

五月大雨や人の家の川登る山 寺屋

天彩山

山登る所の雨ももて大山は

大龍寺飛泉

六月廿七日 飛泉ももて大山中 升六

裁路のさし深

秋風はあもつらにさるれ 乙二

若くは寺詣

推は木のさつれもさる式 成良

若くは寺詣もさる式 成良

畫賛

芭蕉翁像

りたつて人ふもあはれは 升六

破るは

秋風はすもあつて 升六

七賢圖

聖人のうへはあはれは 升六

夏はあはれは 升六

冬はあはれは 升六

信じてかゝる事は禁士朝
振青人々事歟りてゝ

花は事別れ心等々
龜

紅水は流たきく代は生

子代能尼國 打破鏡來此汝相見

うしろを月は鏡もつたれ

筆は終る

きしけりや聖いし月もは涼

毒花は花より重きもの

難波は水も毒も花は初ま

思ふ國

かゝる山は花は静も老いけり

豊後経師は画をぬ

冬より二人はつらなり

鐘は大石

鼓は中々注息は色川昭は光 通彦

落し麻重なり

月居

牛は重

牛乳角玉はいふはいのきき 素子

詩語

毒柳渡江春

いそひし川へさあへり雪柳 升六

誰不送春秋一年三百日煙霞藥此身

忍治愚癡疾

月夜を雪の秋も彩法師 士朗

粒々皆辛苦

吹風や秋は田より飯の上 樗牛

呂洞賓所謂雖貧樂有餘

塵世の事雪は夜よりふりあり

二月賣新絲五月糶新穀

素玉は秋をいふ心晚福は 月居

送君還旧府

さかへり月夜をいふ心山さき 樗牛

高岳院晚鐘

鐘の音よりいふ心秋はくれ 弄淵

夜半鐘聲到客船

はれふも西とわかれ 弄淵

虚公玄後石屏存

雪とけし千々さる水も石に流る

酬

粉骨碎身未足
空念仏の菊をうきくさるる亀

只聞秋歎聲

見るとは思ふとくは秋のそ 升六

祝

大さる隈のたつた新が士朗
初老賀

遠く白け門をひくく初老葉升六
うはく六七はまを雪に

うはく白けくやうけ山さう

身暇賀

鶴の羽をにつけ松の花 身暇
つく枝をうきくさるる水も石に流る

たうとら好者 二章

やうむやうむくさるる水も石に流る 士朗
月をうきくさるる水も石に流る

古稀賀

花とくく人け日乃る葉か 升六
うくくと老女に山乃日ハ正

壽梅八十賀

うきもさこちさるる木影に花 壽測
未報く豆儿を笑くも

権めあまちひきねるる一まは花 升六
柱石舎初憾

きく時をくねくまきのなり
一囁くつをきく

いけしきもききあふるうき花 乙二

一提め糖粒瓶をきき花 升六

梅島やさくくききつるき 升六

ききく婚粒ハ上己けききつるけり

離れききくききくききくききく 壽測

二とせききくききくききくききく

きききききききききききききき

初きききききききききききき

枝葉木きききききききききき

ちきききききききききききき 月居

ちかあやちよしりきて終へ
 ふいせせれゝゑたちもあゝこの
 らんらんらんはふらゝもななく
 かり 雲まゝのささふふふのも
 ちかたり ねのま蚊眉の中にあが
 借題お流乃のねはふいふちや
 あゝい人何てふかにいゝ人れ

浪華書林

岡田種玉堂藏板書目

大坂心齋橋通北久太良町北江入

河内屋儀助

神代卷

全二冊

同
頭書

全二冊

同
正訓

橋本稻彦著
近刻

全三冊

神代紀葦芽

本居大人校正

全六冊

此谷ハ遠州土萬侶先生ノ著述ニシテ賀茂真淵
本居宣長兩大人ノ正説ニモトヅキ古ヘノ訓点ニ復シ
古義ヲサトシタル書ニテ古学ニモトヅクニ便リヨキ谷
ナリサレバ古学ニ入ル人先此谷ニ因テ神代紀ヲ解スベシ

校正古語拾遺

齋部廣成著

全一冊

古語拾遺言餘鈔

全五冊

古語拾遺ト云ハ神代以後神社祭事等ノ古
法ヲトリウシナヒシ事トモヲ記セシ書ナリ其本
昏ニウタカハシモノヲ明辨訳釈シテサトシタル
言餘鈔ト云

古文真寶後集

後崎先生頭書評註

新刻全二冊

同 無点再版

全二冊

虞書新志

唐本翻刻

全八冊

隸續

同

全四冊

而漢晉魏ノ間ノ碑碣石經ノ多ク其外刀鏡鼎ノ類スベテ漢ノ代ノ遺文ヲアツム

五代史

補刻

全十五冊

潛夫論

同

全五冊

後漢ノ王符著述ニシテノ時代ノ得失ヲツシル所
ナリスベテ三十五篇アリ

古註
新註
大成四書字引

小本

一冊

四書字引アミタアリトイヘドモ古註新註ノセシ
サク委シキハ此各ニオヨブモノナシ 実ニ四書字
引ノ大成ナルモノナリ

古語拾遺示業節解 全四冊

符辭考 賀茂真淵大人著 全十冊

同 續紹 上田秋成大人著 全七冊

掌中符辭例 全一冊

枕詞補註 尾崎雅嘉大人著 全二冊

和歌虛詞考 加藤景範著 全二冊

紫式部日記謗註 壺井義和著 全二冊

日本紀の御局の考 松の屋大著 全一冊

紫女七論 安藤為章先生著 全一冊

源氏新釋想考 賀茂真淵大人著 全一冊

古今類句 山本春正著 全三十四冊

國意考 賀茂真淵翁著 橋本稀彦再校 全一冊

松の屋文集 藤井大人著 全二冊

和楷正訛 春臺先生著 全一冊

開口新話 全一冊

批點檀弓 全一冊

西京雜記 全二冊

作文初問 全一冊

斥非 春臺先生著 全二冊

文論詩論 同著 全二冊

茶山集 宋曾我著 全四冊

譯文要訣 全一冊

同 附錄 全一冊

東郊先生文集 全五冊

棲碧山人百絶 讚岐牧麻溪先生著 全一冊

詩學新論 全三冊

明詩礎 小本 一冊 同續 一冊

高士傳 唐本翻刻 全三冊

物類品隲 全六冊

醫斷 吉益先生 全一冊

熊志 熊膽製方真偽明弁 全一冊

腫脹要訣 全一冊

無名抄

鴨長明

全二冊

細川幽齋聞書

全二冊

同聞書全集

全三冊

俳諧むくり喰

全二冊

此書ハ貞徳鬼変ノ角虎堂と初メ作ルモノナリ
家ノ教方ニテ教テ初メ作ルモノナリ
少シク教方ノ多キモノナリ

發句新五子稿

全二冊

此書ハ太沢菴村青菴曉堂國文五子ノ教方
ニテ作ルモノナリ

古今俳諧明題集

涼帝子撰

全五冊

雫良七郎集

全二冊

斷易早合点

全二冊

此書ハ諸ノ占法ニ益アルモノヲトリ
初メトイヘテ知リ
ヤスク覺エヨキヤウニ書トリ
書物ヲモタズテ周
易占考ヲ知ルノ極意ヲシルス

易道撥亂

春臺先生著

全一冊

易占要略

同著

全一冊

貴人帖

廣澤先生書

全一冊

大橋俚語千字文

明浦先生

全二冊

周興嗣ノ千字文ニナラヒ本朝俗語日々取扱フ
文字ヲ和様ニ書シ石摺手本トス

當流字盡小謠

頭書

商賈往來入

全一冊

即席料理

折本
全一冊

同料理早鍋

兩面摺折本

全一冊

驥
立
蟲
日
記

全一冊

此卷八管茶山河崎敬軒西先生ノ東海道紀行
荅酬ノ詩集ニシテ附スニ鵬齋茶山西先生東都日
本稿上ニ邂逅ノ詩アリ其外奇事頗多シ

近人小詩

栖碧先生

全二冊

管茶山寛齋大窪詩佛池五山柏如亭
霞亭ノ渚先生ヲ始共外名賢持アミタアリ求テ
四方ノ英傑ヲ知リタミフベシ

風牀小詩

嶺中風牀上人著作
 嶺岐栖碧山人批点

全一冊

經典餘師

溪百年先生著

全七冊

先生諸解數部アリ大ニ世行レテ人ノ貴宝スル
所タリ今刻ストコロノ易經ハ只意義ヲ發明ス
ル耳オラズト筮ヲ作ス人モ此ニ就テ學バ大ニ判
斷ノ助ケトナルカナドキ第一ノ秘冊ナリ

繪本武勇畫鑑

葦茅艸帝

鐵格子大人著

全八冊

勸善懲惡をいひて陸徳陽報の渾とさ
ゆるも報仇小説の傍をいひ

報仇安達原

文亭主人著

全六冊

廿五日とて安達が第のひらぬ家のものゝ物ふく
はるまじくして給入少候もの

尊圓庭訓往來

全一冊

此まハ字ハ板印のといふも又体尙古まゝ
予の花板の彫かゝるまゝとてゝゝゝは
と讀ぶゝ世に字の深なり

浅瀬の志る魚

招屋大人作

全一冊

俗よりたゞしくながく物あはれなり
かゝる人びとをいふはさうな事なり
且て

烏石成肅公碑

楷書大字石搨

一冊

文政三年庚辰夏四月

出板心高橋北久太所界小江入

書林

河内屋儀助



即席料理

折本

全一冊

同料理早鍋

西面摺折本

全一冊

驥蝨日記

全一冊

此巻ハ菅茶山河崎敬軒両先生ノ東海道紀行
在酬ノ詩集ニシテ附スニ鵬齋茶山両先生東都
本稿上ニ邂逅ノ詩アリ其外奇事頗多シ

近人小詩

栖碧先生

全二冊

菅茶山寛齋大窪詩佛池五山柏如亭篠
霞亭ノ諸先生ヲ始其外名賢持アマタアリ求テ
四方ノ英傑ヲ知リタニフシ

繪本武勇画鑑

葦茅艸帝

鉄格子大入著

全八冊

勸善懲惡を……して陸徳陽報の渾と
……報仇小説の修を……

報仇安達原

文亭主人著

全六冊

……安達が果の……
……修入……

尊圓庭訓往來

全一冊

……
……

